

○ウラジロタラノキとシチトウタラノキについて (山崎 敬) Takasi YAMAZAKI: On *Aralia bipinnata* Blanco and *A. hypoleuca* Presl. var. *inermis* Yanagita

琉球のタラノキ類については二つの見解がある。タラノキと同一種類とする見解と、タラノキとは別種で台湾のものと同じとする見解である。初島住彦氏は琉球植物誌(1971)でタラノキ *A. elata* (Miq.) Seem. とし、鹿児島県植物目録(1986)ではその変種のメダラとして扱っている。一方 Walker 氏は Fl. Okinawa (1971) で台湾にあるウラジロタラノキ *A. bipinnata* Blanco に当てている。

琉球のものは茎に刺がないか、あってもごく少なく、長さ 2-5 mm で下部が太い。小葉は卵形～狭卵形で先は次第に細く鋭く尖り、裏面は白色を帯び、無毛か主脈の両側に粗い毛が散生する。一方タラノキはメダラのように刺の無いものもあるが、一般に刺が多く、刺は下部がやや太いだけで細く、長さはまちまちであるが 15-20 mm のものを混える。小葉は一般に卵状楕円形～卵状長楕円形で先は急に狭くなって尖り、裏面は粗い毛を散生し、脈に沿ってやや密にはえ、緑白色を帯びるが琉球のものほど白くない。こうした差異から、琉球のものはウラジロタラノキであると考えられる。メダラはタラノキの刺の殆どないもので、他の性質はタラノキと同じである。タラノキのある所に稀に見られるもので、一定の分布域をもつものではない。サンショウに対するヤマアサクラザンショウの様に品種程度の差異とするのが妥当と思う。ウラジロタラノキは甌島、奄美大島以南、琉球、台湾、フィリピン北部と一定の分布域をもち、上記の特徴からも別種と考える。タラノキの若芽は山菜として利用されるが、沢峠安喜氏によると琉球のウラジロタラノキは苦味があって食べないという。

伊豆七島に分布するシチトウタラノキ *A. elata* var. *denudata* Mizushima は東京大学に氏の手記のある標本がある。しかし和名(資源科学研究所集報 38: 122, 1955)や裸名は見当たすが正式の発表が為されなかつたらしいので、どのような特徴でタラノキから区別したかわからないが、標本上の手記と、氏との私信から情報を得たと思われる杉本氏の新日本樹木検索表に記載されている特徴からすると、刺の無いこと、葉が3回羽状複葉であり、小葉の裏面が白色であることが特徴とされる。刺の無いこと、葉の裏面が白色であること、また標本でみると小葉は卵形で先が細く鋭く尖り、裏面は脈の側に粗い毛がある他は無毛であるなどウラジロタラノキの特徴をもち、種類としてはタラノキよりウラジロタラノキに属すと考える。全体が大きくて、葉は3回羽状複葉であり、小葉もやや厚くて大きいので、ウラジロタラノキの変種として扱うのがよいと考える。青ヶ島、御蔵島、神津島の標本は総て同じである。似た様な例はシマガマズミヤサクノキにも見られるので、同じ分化の経路をもつものであろう。

伊豆七島のタラノキが本州のものとは異なることに最初に気がつかれたのは柳田由蔵氏(1937)である。トゲナツタラノキ、ミクラジマタラノキの名をつけ、正式の学名をつけラテン語で記載しているが、原寛氏の日本種子植物集覧にも載せられておらず、殆ど

気付かれなかったものである。ここで注目されるのは *Aralia hypoleuca* Presl. の変種として書かれていることである。この学名は以前ウラジロタラノキの学名として使われていたものであり、柳田氏が伊豆七島のものはタラノキよりウラジロタラノキに属すと考えていたことを示している。しかし、その記述はタラノキに比べて刺の無いことが強調されているだけで、どうしてウラジロタラノキの変種としたのか全然書かれていないのは不思議である。ウラジロタラノキは刺が少ないのが常態であるが、その変種とするのに刺がないという学名をつけたのも理解できない。常谷幸雄氏（伊豆青ヶ島植物調査資料, 16, 1961）は伊豆大島のものは葉の毛は少ないが刺の多いものがあり、伊豆七島でも南に行くに従って刺が少なくなるけれども全体としてはタラノキと異ならないとしている。大島の標本は見えないが、葉に毛が少ないとしているから、やはりウラジロタラノキであろう。今後確かめる必要がある。

本文をまとめるに当たって文献を教えて下さった水島うらら氏に感謝します。

Aralia bipinnata Blanco var. *inermis* (Yanagita) Yamazaki, comb. nov.

Aralia hypoleuca Presl. var. *inermis* Yanagita in J. Japan. Forestry Soc. 19: 340 (1937).

Distr. Pref. Tokyo, Izu-sichitō.

Aralia elata (Miq.) Seemann f. *canescens* (Fr. et Sav.) Yamazaki, stat. nov.

Aralia elata (Miq.) Seemann β *canescens* Fr. et Sav., Enum. Sp. Pl. 1: 192 (1875).

Distr. Honsyu, Shikoku and Kyushu. (東京大学 理学部附属植物園)

○ムッチャガラについて (山崎 敬) Takasi YAMAZAKI: On *Ilex mutchagara* Makino

ムッチャガラはイヌツゲに近く、特に九州南部のイヌツゲの変種ツクシイヌツゲによく似ていて、イヌツゲの変種とされることもあるが、初島住彦氏 (1975) は琉球のナガバイヌツゲの変種とされている。若枝が無毛で明らかな稜があり、葉柄が長い点はイヌツゲよりナガバイヌツゲに入れるのが正しいと思う。両者がどのように棲み分けているのか、琉球をあまり歩いていないのでよく分からないが、ナガバイヌツゲが低地でムッチャガラが山地に生育するようである。分布は奄美大島以南、琉球とされている。しかし、台湾で初めイヌツゲの変種として発表され、後に胡秀英氏が中国の種類に移して、*Ilex triflora* Bl. var. *kanehirae* (Yamamoto) Hu とされたカネヒライヌツゲはムッチャガラと区別ができず、同じものと思う。*Ilex triflora* は中国南部、インドシナ、マレーシアに分布し、果実は葉腋に2-3個つき、果柄は長さ3-5mmと短い、台湾